

巻頭言

労協連30周年、 「失業者闘争」は引き継がれている

労協センター事業団滋賀エリアマネジャー 花崎 昌子

昨年10月から今年の9月にかけて、失職する非正規社員は滋賀県で5,830人に達する見込みで、広島、大阪を上回り、西日本で最多と言われている。県内総生産に占める製造業の比率が41.3%で、他県より不況の影響が甚大だった。

2004年の9月から公共職業訓練を受託し、すでに19期生を迎えている。1期生が10数人のクラスで、これまでに、230人を超える失業者の再就職を支援してきた。

8月から始まった若年者コースは、派遣切り、製造業の倒産、閉鎖に加え、中小企業で10年以上働いてきた働き盛りの30代の男性が目立つようになった。若年者の上限は、今年から35歳から40歳に引き上げられた。若者の自立の年齢もどんどん高くなってきている。運良く、「公共職業訓練」を受講できた若者は、今後、給料は安くなるが、介護が唯一求人分野であることから、ミスマッチかもしれないが、そこにしがみつき、希望を持って4カ月の訓練に通ってきている。

映画「クライマーズ ハイ」は、私が大

学生の頃に、夏休み、旅客機が群馬県の御巢鷹山に墜落し、520人が犠牲になったときの、地元新聞社の物語である。木にひっかかって、生き延びていた少女の姿は目にやきついている。映画では、気が触れそうになる、現地から帰った記者が、上司から正気に戻らせようと激しく叱られるシーンが印象に残る。「おまえが大騒ぎするため、520人が亡くなったんじゃないんだよ！」と。これまで、さまざまな失業者たちと向かい合ってきたが、今年に入ってから、まさに私自身が大騒ぎしたくなるような中で訓練は行われてきた。「そうだ、そうだ」。私が大騒ぎするために、大勢が失業しているのではないのだ。しかし、平常心など、保てやしない。労協の仲間と現場を心の拠り所に、私自身も精神状況は保たれているし、縁あって、出会った訓練生たちも、労協を大きな拠り所にしてくる人々が増えてきている。

そんな中、労協連が30周年を迎えている。こんな私たちを頼ってくる人々がいる。職安は、人であふれている。まるで「歴史は

繰り返される」と軽く言われそうだ。失業者闘争の歴史を繰り返している。

8月27日、労協センター事業団、地域事業団のリーダーたちが合同で集まり、雇用保険を受給できない人々の職業訓練の基金訓練の取り組みについて、激しい意気込み、闘争心で話し合われていた。さながら、映画の新聞社のような空気だった。休憩中、会議で消極的な意見を言った私に対して、「なんで、花崎さんは、基金訓練をしようとしませんか?」と、激しく、若い30代のリーダーにつかれる。働く場所、雇用をどうつくるかが、喫緊の課題であるのに、困難な失業者を相手にすることから逃げたいのか?と言いたげだった。

8月1日、滋賀発「反失業フォーラム」は、北九州ホームレス支援機構の奥田知志氏を講演者に迎えられたこともあり、100人の参加者が豪雨の中、来てくださった。失業手当が切れ、生活保護を受ける人が相次いでいる。そのフォーラムがきっかけで知り合った2人の男性は、組織に属さず、思いや使命感で、たった一人で大きな仕事をやり続けている。

近江夜まわりの会の林氏は、半日、警備の仕事をしなが、ホームレスの生活保護申請や住居手配、引っ越し、片づけを行っている。日報が毎日送られてくる。大津の琵琶湖沿いで途方に暮れながら親切な方に出会い住処を確保するAさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさんの日記帳だ。

草津カトリック教会の太田君は、70世帯の日系ブラジル人、ペルー人などに、毎日

食料の調達と配給、相談、申請業務を無休で行っている。まだ20代の若者だ。大きな組織に属しているのではなく、無給で、個人のミッションがそうさせている。太田君は、朝いちばんに大規模農家に行き、規格外の野菜を集めて、配給する。玄米も安定的に供給される仕組みもつくった。教会の一室が倉庫になっているそうだ。外国人の神父が、昨年末頃から、「太田君、在日の人々の支援を何とか起こしてくれませんか?」と言われ、今年の3月になってやっと始めてみると、神父さんが想像以上の動きをつくってきたようだ。太田君は、食事も忘れて動くからか、たまに、労協で余った昼食を食べてもらう。最近になって、彼がみているあるNさんというペルー人のお宅に、私たちの組合員が弁当の残りを定期的に届けるようになった。3世帯が狭い市営住宅に10数人で暮らしている。「救済」が必要な状況なのだ。

社会福祉の歴史も繰り返されるのか…と仲間と話し合っている。介護保険制度のような「スマート」な仕組みの中で、介護の仕事をする時代であるにもかかわらず…働く場所がなくて、失業保険を受ける時代である。世の中への不安な気持ちもあり、せめて、「救済」に関わりたいという思いは自然ななりゆきだ。

奥田知志氏が、講演の最後に、若者のホームレスの増加と「自己責任論」の蔓延について、嘆いておられた。「助けて」と言えない若者が増えていると。「クライマーズハイ」という言葉は、登山者が恐怖感から

麻痺する精神状況らしい。

戦後の復興期、高度成長期と、希望のある社会を生きてきた人々とちがって、物心ついてからずっと不景気という、平成生まれの職業訓練生1号もやってきた。不景気にある種、麻痺しているかもしれない。

バブル期を横目に恩恵も受けずに過ごしてきた私には、この度の「大失業時代」を横目にみることはできず、麻痺することもできず、やれること、できることをするしかない、右往左往状態だ。

私自身が、縁で16年前に労協に出会って、伸びしろをグーンと引きのばしてもらえたように、ワーカーズコープにやってきて、あなた自身の伸びしろを仲間の中でのばしてください！と、失業者たちに伝え続けるしかない。

選挙が終わった。「失業率最悪 一票期

待と不信」と選挙前に新聞が書いていた。選挙後、何か、長い間覆い被さっていた重しが取れて、「どうぞ皆さん、仲間と思いきり結束してよいのですよ！」という「自由」を与えられたような気がした。労協で働き16年経つが、私などは最も「自由人」と言われた部類である。それなのに、さらに「自由」を感じるのだから、長い間「不自由」に麻痺していたことになる。そのツケを、さまざまな失業者から受けているものだから、困惑し、単純に希望を語れなくなっているのだ。

30周年を迎え、「失業者闘争」は更に引き継がれている。私にできること、仲間ができること、自らの課題は何か？どんな結束で、どこをめざすか？容易ではないことも数々あるだろう。負けずに、諦めずに…。